

一葉の愛——真実と虚構

〔旭川婦人大学講座〕

木村真佐幸

ただ今、過分なご紹介にあずかりました、札幌大学の木村でございます。この度は、六百人というすばらしい盛況、かつ、熱心な会にご一緒できましたことを光栄に思います。

さて、「一葉の愛」―真実と虚構―という、ややキザな題をつけておりますが、一葉に入ります前に、メインテーマが「愛と人生」ということでございますので、私共の日常生活の中から、二、三、話を拾って参りたいと思います。

日々楽しいこととは

ところで、いかがでございますでしょうか―日々楽しいこととはどのようなお考えになりますか。いろんな考え方がありますが、私は、一つは人間関係がうまくいっていることだと思いますが、どうでしょう。しかし、一口に人間関係と言いますが、これほどむずかしいものはありません。むしろ、永遠に未完のテーマです。

私も妙なことから学長選挙で、柄にもなくこのような立場に立たされてしまいました。やはり、この人間関係はこれからも一番大切にしていきたいと思っております。そこで人間関係の円滑ということからひとつ考えられますことは、まず相手の立場を理解する、相手の立場になって考えることではないかと思えます。たとえば、私共の仕事ならば、学生諸君と私の立場で、自治会の執行委員長と渡り合うとい

うことがあります。そこで学生が必ず言いますのは、「先生はどうしてゼミで話をしたり、コンパで一杯飲んだりしている時のように話をしないのか」と問われます。しかし、これは一対一の友人として話をするのではなくて、かたや自治会の執行委員長、私は大学の全体の立場であるわけですが、これはなかなか分かってもらえないのです。それを理解し合う一要因としては堅い事を申してなんですが、それは知性であり論理ではないかと思うのです。つまり理屈で考えるということ

です。しかし、それもむろん大事なことなのですが、いま一つ大切な要因があると思えます。それは何かといいますと、人間、理屈で分かっています。感情的に納得しないと行動できません。しかも、第三者にとっては、そんなつまらんこと、気にする方がおかしいということでも、当人にとっては重大問題というのとはたくさんあります。そうして、その問題が片付きませんと前には進めません。そういうことを考えますと、理屈はもちろん大事ですが、しかしそういう感情を全部包み込む必要がある―そしてそれは、豊かな人間性と愛情だと思っておりますが、いかがでしょうか。まして家族関係というのは、もうすでにいろいろな先生方のお話があったと思いますが、子供は、親が子供を理解してくれもの、一方、親は子供が当然、親の気持ち分かるものという先入観と期待感があります。つまり換言すると、甘えの構造が加

わかります。また甘えがなかったら家族になりません。そういうことで、私は知性と、いま一つ相手の心情を包み込むことができる愛情、これが人間関係のキポイントということになると思います。

今日のテーマは、抽象的には以上のような一側面をもつかと思いますが、一葉の問題に入るためにこの程度で省略していきたいと思いません。

もう一つこの会は、市のご指導のもとに、自主的な形で運営委員の方がたいへん熱心になさっていらっしやる、これはすばらしいことです。

私は文学関係を中心に、いろんなところでこのようにお話をする機会がありますが、六百人というのは初体験です。本当に熱心さには頭が下がります。同時に、このようにたくさんの方々を、しかも充実した形で運営されている、これもたいへんなことだと思えます。

こういうことを考えますと、もうひとつ、日々楽しいことにつけ加えることとして、瞬間の充実を挙げることができないのでしょうか。これはどういふことかといえますと、自己の存在証明がはっきりしているかどうかということですが、しかし、無人島で、我れここにありと頑張つてもしょうがありません。この存在証明が客観性を持たなければいけないのじゃないでしょうか。そしてそれが自分でも納得し、第三者も評価してくれるもの、こういうことが必要じゃないかと思うのです。

それから瞬間の充実でもう一つ、これも堅い話になりますが、小さいことでも大きいことでもいいのですが、かくありたいという願望、あるいは理想—たとえば、学生が車を買いたい、楽器を買いたい、だからアルバイトをする、私はこれでいいと思うのです。それを買うために努力をしている。私は、幸福とは旅をする方法であって目的ではないと思うのです。理想があつて夢がある……、現実理想のどの辺まで接近しているか—この関係ではないかと思えます。

恋愛の構図

それから愛の問題、特に、一葉の愛の問題を導きだすための前座になります。愛の構図で一番はつきりしているのは恋愛だと思つて。人生はいろいろな人との出会いがあり、そしてその相手がきわめて温かく包んでくれることも多いと思つて、しかし反面、時と場合によって人を傷つけながら生きていかなければならないということもあります。たしかに恋愛というのは美しき誤解であるかも知れませんが、「本日、私はAさんと恋愛します」と、ラウドスピーカーでがなる人はいません。やはり何んと言つても二人の閉鎖的な世界から出発するのじゃないでしょうか。ここに二人の秘密がなかったら、恋愛の充実感がないのではないかと思うのです。

それから恋愛の構図ですが、まず自分自身への反逆、相手によって自分の方向が変えさせられる—これが原点です。食事に行きまして、相手に自分の嫌いなものを言われてしまった、しかし、私も好きですと言つて目を白黒させずに平然と食べなくてはならない。そういうことで、相手によって自分自身の人生態度を変質させられるぐらいのものじゃないとだめなのじゃないかと思つて。そして恋愛にはゴールがないと思つて。本当に相手が自分を必要としているのだろうか。そういう不安を伴つていかなくはないけれども、彼は彼女は自分がいなくて絶対だめだと自分で納得したいのですが、それはちょっと違うと思つて。やはり、愛して欲しい、愛さなくてはいけないという、能動性と受動性が同時並行していくものが恋愛だと思つて。ですから、積極性、能動性ということと同時に、受動性、つまり受け身という二つの要素が複雑にからんでいる。たとえば、芸能界などと申しては不謹慎ですけども、記者会見などでどうしてあの人を好きになつたのですかと聞かれて、第一点これ、第二点これ、第三点と列挙するのを見かけますが、しかし、これはもうある程度醒めています。好

き嫌いは論理ではありません。この例はすべての事を正当化するため
に後で理屈を付けているのです。皆様方にも、すばらしいお子さんが
いらっしやると思います。まだ小さいお子さんの方もおられるでしょ
うし、適齢期の方、あるいはすでに結婚されている方もいらっしやる
と思います。どんなにすばらしいボーイフレンド・ガールフレンド
を連れて来ても、親は絶対納得しません。私も約二十数組程媒酌しま
したが、私のところに話を持って来る時は大体むずかしい内容になっ
ています。一般的に言って職場の上司に私事を持ち込むと困るとい
うこともあります。教師ですと利害関係がございませぬ。聞いて見ます
と大体のパターンとして何れかの親御さんがウンと言わない、それで
はと乗り出してお父さんに電話をかけましたら、明日は出張、明後日
は会議と……つまり永遠にだめなのです。掌中の大切な珠玉を遠い世
界に持ってゆかれる気持ちになっています。それを奪う憎つき者が来る
のですからだめなのです。これは理屈ではない訳です。

今日的父親像

それから、これはすでに話題になったことと思いますが、今日的父
親像、母親像についてもあてはまるのじゃないかと思うのですが、お
父さんがここにおられるということは、経済的にも精神的にもあるい
は社会的にもいろんな要因をこめて、いつでも子供の相談相手になっ
てくれるということ、これもすばらしい存在証明になる訳ですが、
相談するということは、子供がまだ自立していないことも意味します。
特に父親の存在証明というのは家族の中に埋没吸収し、消滅するとい
う逆説的論理でしか証明するすべがないのじゃないか。もっと別な言
い方をしますと、もうお父さんは何もなくてもいい、子供が全部や
れますからということになった時に、初めて父親や親としての存在証
明があるということではないかと思うのですが、どうでしょうか。で
もやはり、子供に対して経済的にも、社会的・精神的にもという気持

を持つのが自然だと思えます。自然だと思えますがこれはやはり、ま
だ子供が自立していない、本当に巣立っていないということになりま
す。本当に巣立って親と同じところに立った時に、初めて存在証明が
成り立つのだと思えます。しかし、これも言葉が適当ではございませ
んが、そういう状況になった時には、親御さんはもうこの世にいない
のではないのでしょうか。でもそういう厳しい状況も受け止めていかな
ければならないと思えます。

「ノア」の方舟

「ノアの方舟」の例をあげたいと思えます。私はクリスチャンでは
ありませんので、皆様の中にもしそのような方がいらして、読み違
いだというようなところがございましてらご指摘いただきたいと思
います。

武田泰淳さんは、ほんのわずかな期間でしたが北大で中国文学の助
教授をしていました。北海道文学では欠かせない人ですが、作品の一
つとして「ノアの方舟」のことを書いています。私もこれを読み
直してみました。ご承知のとおり、神が人類の墮落を怒って、大洪水
で人類の絶滅という話です。その時にノアの一族だけが方舟に乗って
脱出し、人類の絶滅をまぬがれることができたのです。その時、ノア
には三人の息子がいました。数字を三であらわしたことは、多い数を
象徴したのだと思うのですが、その兄弟の中で、長男と三男は父親を
絶対視しています。次男は本当にそうなのかあと、自分で主体的に
判断しようとする訳です。目の前で他の民族がどんどん溺死してい
るのを、長男と三男は父親の意志は神の意志だからとし、次男は父親の
意志は神の意志かもしれないけれど、もしかしたら他の民族をも助け
てやりたい、でも神の意志だから仕方がないと思っているのではない
か―つまり、他の民族が目の前で溺死していく―他の仲間達を見殺し
にするような、そんな冷酷な父親であって欲しくないという願望を持

っている訳です。

さて洪水が終わりまして、「ノア農夫となりてぶどう園をつくることを始めしが、ぶどう酒を飲んで酔って天幕の中で裸になれり」とあります。次男のハムについてですが、「次男のハムは父のかくしどころを見て外の二人の兄弟に告げたり」。すると二人の兄弟、つまり長男と三男は、「衣を取りて後向きに歩みてゆきて、父の裸体を覆えり」ところなっているのです。

よく学生諸君に「君達だったらどうしますか。」と聞きます。特に「次男のハムだったらどうする。」そして、「大洪水の時に人類の絶滅を防いだような偉大な父親が、何故素っ裸で寝るような無様な事をしたのか。」みんな一応は核心に近いところまで考えるのですが、残念ながら一〇〇パーセント私の期待している答えは出てきません。

次男は、父の泥酔した状況を見て、お父さんは神様ではなく人間だったんだと分かった訳ですが、そのぶざまな恰好を他の人に見せてはいけないという配慮に欠けていたのじゃないでしょうか。本来ならばこっそり毛布でも布団でも持ってきて父親に掛ける。そして、父親がそんなぶざまな恰好をしていたということは永遠にタブーじゃないでしょう。絶対にはいけません。それが次男は、「ほら兄貴よ弟よ、俺の言った通りでしょう。やっばりお父さんは神様じゃない人間だったじゃないか」と……。一見、主体的に見えるのですが、父親の肉体的な弱点を逆手にとって、自己の存在証明に使ったのではないのでしょうか。

この後どうなのかと申しますと、父親ノアは、我が子、次男のしたことには激怒して、永久に樂園追放です。つまり「長男と三男の奴隷の奴隷になるがよい」と。長男と三男の幸福は永遠に保証したのですが、次男については、その次男の周辺家族も含めて奴隷となれという永遠に「樂園追放」……厳しい審判をしています。これは一体、何故なのだろうと、武田泰淳さんも書いています。学生諸君に聞いてもよく分

からない。私は思うのですが、結局、父親は孤独だったのでございましょう。神の意志によって、他の民族を見殺しにしなければならなかった―それは神の意志だから仕方なかったにしても、洪水が去って平和が来て父もひとりの人間となった場合、いつも十字架を背負って罪の責苦にさいなまれていたのではないのでしょうか。そしてワインを飲んで、酔っぱらって素っ裸で寝るといふ、泥酔した時だけが、その苦しみから開放されていたのではないのでしょうか。ですから次男も「うかお父さんはつらかったんだなあ」と分かったら、そのお父さんの気持ちを理解し、忖度すべきじゃないでしょうか。

人間関係は理屈ではなく愛情で包まなくてはいけないのではないかと、言いましたのはその意味です。家族は避けて通れません。どんなことがあっても避けて通りようがないのです。時には「感情の容れ物」の機能も果たさなければなりません。だとすれば悲喜こもごも、硬軟・清濁をあわせて包まなくてはいけないのではないのでしょうか。しかし、これはなかなかその立場に立ちませんと分かりません。そのように学生に話しますと、深刻な顔をします。自分が親になってみて初めて親の気持ちが分かる訳ですけれど、「その時には親御さんはもうこの世にいないよ」と言います。そらちの隅の方で、「親孝行したくなくても親がいる。」……ギャグをやります。おふざけですが……。

では、つづきまして以上申し上げた日々楽しいこと、愛の構図とは何か、今日的父親像とは何かという問題を、一葉の問題に移し変えたと思います。あと、一時間しか残っていませんが、一時間で資料に掲げた項目を消化しようということなので、いささか無理がかかると思うのですが、一葉の愛とは何なのかということ、一葉の生涯の中から問題点を指摘しながら進めて参りたいと思います。

一葉の愛―真実と虚構

まず「真実と虚構」という題に置き換えましたけれども、一葉は本

当に貧しかったのです。しかし最初から貧しかった訳ではありません。この間も、学生を連れまして、一葉関係・鷗外関係の臨地研修をしてきました。東大の赤門前に法真寺というお寺があります。去年の十一月、大野靖子さんの筆になるNHKのテレビ評伝「樋口一葉」が五回放映されましたが、とても良く構成されていました。資料の一部には私の発掘したのも使われていましたが、あのお寺の近くに一葉が住んでいました。一葉のお父さんはその法真寺の境内の隣接を含めて約二百数十坪ほどの土地を持っていました。中流の生活だったので、それが父親が亡くなってから苦しい生活がはじまったのです。

どうでしょうか、現在でこそ作家の方々、ご当地には三浦綾子さんもいらっしゃいますが、作家として独立して一本立ちしている。しかし、それはほんの一部でございましょう。それを明治二十年代、女流作家として自立しようというこの根性は了としても、しかし大変な冒険です。だが、一葉はそれを成し遂げました。明日どころか今、食べる米もないという、この苛酷なりアリズムの中にいたからこそ出来たのです。

両親と俄^{にわか}士族―旗本直参の^〆亡霊

その点をいくつか拾っていきます。一葉の両親はもと山梨県で中農でした。青年時代、青年団の会合、勉強会などで二人が顔を合わせているうちに、二人は恋愛し、一葉の姉が生まれるようになります。私は現地を駆けずり回って、いろんなことを調べております。その結果、本日はかなり立ち入った話になりますけれどもごかんべん願います。申し上げるまでもなく、文学研究はあくまでも作品論なのです。したがって、作家がどういうことをしようと、私生活には関係ないのです。それをほじくりますとプライバシーの侵害になります。

ただ一葉の場合、二十四歳と六か月という短い生涯ですし、しかも明治時代ということもあり、加えて小学校も中退、女性の社会的な活

動ということも、今日とはその比較になりません。ですから、作品化するにしても、自分の直接的体験か精神的体験しかないわけです。私は、一葉の本当の苦しみを理解したい―言いかえますと、作者の創作主体に迫ることが、本当の一葉文学を理解することになると思うのです。一葉文学成立の背景という点から、それでやや立ち入ったこととなりますが……。大学で学生諸君に話します時はややことばを選びますが、本日の皆さんは、いろんな意味で巾広くご理解の深い方々ですから、随分えげつないことを言うなあということがありましても、どうぞ誤解ならさぬようお願い致します。

後期一葉文学の原点―久佐賀義孝問題

研究者のはしくれとして、いささか資料についての感傷めいたことを申し上げていけないのですが、実は資料に対する愛着があります。今回の資料中、別表(2)の明治二十七年二月十一日付の「東京朝日」久佐賀義孝については、これを調べるまでに十三年かかりました。四十七年に発見したのですから、三十年代から始めたのです。新聞も、今はマイクロフィルムもありますし、縮刷もあります。しかし当時はなにもないので。どこの図書館に、どこの新聞社に、明治時代のどういふ新聞があるか、まずこれから始めました。夏休み・冬休み旅費を貯めては一枚一枚めくるのです。今年もだめ、今年もだめその結果ほこりを吸って、今、アレルギー性鼻炎になりました。治らないのです。実はこの講演を始める前にも薬を飲みまして押えています。クシヤミが止まらないのです。研究後遺症と勝手に自負していてもこれはとてもつらいものです。でも、その苦勞の甲斐があり、今はお陰様でこの資料(別表(2)新聞)によりまして、一葉学の世界でも、なぜ一葉が久佐賀という占い師に「千円」の金を都合して欲しいと強力に食いがつたわけが分かったということと評価されています。ただ現在の千円と思っははいけません。今は当時の約一万倍ですから一千万円で

す。これは大変なインパクトを与えています。なんの経済的能力もない、担保もなにもない者が一千万円貸して下さいと言われても、見も知らずの人に、貸しますか。貸しませんでしょう。

皆様の前でこういうことを申しては不謹慎でしょうが、一葉の苦しみとして理解して下さい。久佐賀は、貸しましょう、その代わり体が交換条件です。こういうことです。そのちょっといやらしい男、憎つき男が（資料別表3の写真）久佐賀義孝というのです。私は好きこのんで一葉のプライバシーを侵害しようと思っていけないのです。そこまで追い詰められて借金をしても作品をとという苦悩を理解していただきたかったです。

資料の新聞の右側に特別報というのがありますが、明治二十七年二月十一日の東京朝日です。そこに表彰状の写しがありまして、「五百円」と書いてあります。当時の相場師の方々が組合を作っていました、今度の相場は何が当たるかということ、占い師である久佐賀義孝にいろいろと指示を仰いだのです。それがすべて適中しまして、その鑑定料の外に、表彰状と金五百円を添えてお礼として差し上げたのです。

この「五百円」は何倍も活字を大きくしていますので、いやが上にも目立ちますね。一葉の生活収入の方途としては、浴衣を洗濯して一銭ですから現在ならばさしずめ百円でしょう。夏の着物を一枚縫うのに何日くらいかかりますか。それで七、八銭、綿入れで十四、五銭です。それがどうでしょう、ボンと五百万円、鑑定料の外に貰う男がいる。

一葉は、なぜ久佐賀に一年半も、ああ言えばこう言う、こう言えばああ言うといった具合に丁丁発止でわたり合ったのか。たしかに、後期の文学の「たけくらべ」はきれいな作品です。しかし、娼婦の世界を書いた「にぎりえ」、あるいは鬼のような夫、親のため子のため兄弟のための犠牲による悲劇性を描いた「十三夜」のお関。疑似的姉弟の構成で、両者の生き方の落差を描いた「わかれ道」。あるいはまた人妻「お律」が書生と逢瀬を重ねる―しかし、当時としては珍しい大胆な「裏

紫」、途中でストーンと作品を中断してしまいたいわゆる問題作。母親と同じ行為を繰り返し、結局、性と遺産の問題をテーマとする「われから」―。これらは久佐賀体験を除いては語れないと思います。かたや「たけくらべ」という詩的叙情的な作品を書くかと思うと、現在でもうらんと唸りそうなの、しかもまだ二十二、三歳の娘がなぜこのような作品を書いたのだろうか、疑問を抱かざるを得ない作品がある―どうも納得がいかないのです。換言しますと、現在でも光かがやく多くの問題作が何故書けたのだろうか、私はこの問題を納得したいために、本当にバカみたいになって、このようなものを探し歩いたのです。

これは、神奈川県立図書館で発見しました。それがこの資料の新聞なのです。「五百万円」ですから、一葉が結局はこれにしがみつこうことは当然だと思えます。そういうことで、若干資料を通して一葉の私生活ならびに心情に立ち入りますけど、くり返しますが、決して趣味で立ち入っているのじゃございません。あくまでも、一葉の苦しみを理解するということでご勘弁下さい。

さて、先程言いました一葉の両親の旗本直参、俄士族問題は、「一葉の愛」―真実と虚構―を考えるうえで重要なバックボーンとなります。結局、一葉の両親の結婚―特に母方が納得しませんでした。結婚前に妊娠ということもありますが、とにかく、子どもが生まれるようになってしまったのですから仕方がないと思うのですが、周辺に理解を得られない二人は手をたずさえて江戸へ出て十年間、本当に粒粒辛辛します。

一葉と「死」の陰―長兄泉太郎の死と従兄弟幸作の死

ところで私はこのように、いろんなことをあたっていろいろうちにある事に気付きました。一葉の兄さんは泉太郎といえます。実は二十四歳で亡くなりました。現在の明治大学法学部の前身、当時の明治法律学校です。ここを途中で辞めましたけれども、四月、大蔵省に入って十

二月に死んだのです。原因は結核です。一葉も結局は結核です。後でまたふれまされども、従兄の幸作も似たような病気で死にました。

現在では、結核の治療が進んでいまして順調に治ることが多くなりましたが、私の記憶では、終戦直前ころまで結核になりますと、あの家は肺病の「まき」だからお茶なんか貰うなどと言う声があつたと思います。一葉も、結局はその病気だったので。ですから一葉は、必死になって作品を書いて、久佐賀にまで体交換条件と言われましても、激しくしがみ付いて行つたのは結核進行にも原因の一端があります。

一葉の文学を考える時、一葉の愛を考える時、この死という問題と無関係ではないのです。初日に旭川医大の学長さんがお話なさつたかと思ふのですが、もし家族の方や身近な方を亡くされていた場合、不謹慎なことを申し上げて大変申し訳ないのですが、死というものはいつかは必ず来る現実問題です。しかし一葉の場合は抽象観念ではないのです。兄さんの結核進行状況を見えています。そうして兄さんは二十四歳で死んだ、同じ家にいる訳ですから直接感染しますよね。そうしますと、兄さんの結核進行状況は、そのまま自分の死の軌跡に重なりませんか。だから自分にはもう後がないという訳です。これほど苛酷なりアリズムはないと思うのです。

両親の士族と武家政治崩壊

今の死の問題と共に、両親の問題についてももうひとつ大事な点があります。話をもとにもどしますと、両親は郷里を出まして十年間、父は丁稚奉公をしたり、母親は、我が子を里子に出しまして、自分のお乳を他人の子どもへ、例の徳川將軍のことで大奥の話がありますが、その時、必らず春日の局の話が出てきます。今、東京に春日何丁目、あるいは春日通りという町名・地名がありますが、それは春日の局関係です。その春日の局の關係者に、稲葉大膳、陸軍奉行並がいます。二千五百石です。一葉の親たちは三千石とさばをよんでいます。二千

五百石です。このお姫様の乳母になります。我が子のためのお乳を他人様に飲ませている訳です。そうしてお金を貯めました。三百八十三両二分銀十匁のお金、約二千万円、よくテレビで藤田まことなどがやっています。大岡越前守がいた南町奉行所の八丁堀同心―大小をさしています。袴のはかない侍です。三十俵二人扶持という安い給料の武士です。この武士の株を二千万円で買収したのです。もっとも、最初百両であとは年賦でした。しかも農民から武士にはなれませんが、偽の家系図を作りました。かつて武田信玄の家来であつたと……。

これだけ苦勞の十年間、我が子を犠牲にし、名前を九回変えて、粒粒辛苦して二千万円貯めてやっと武士になりました。しかし皆様、人生うまくいかないものですね。や々と待望の武士になつたと思つた途端に、半年で武家政治の崩壊です。まさに槿花一朝の夢になりませんか。そうすると親たちはどうなりますか。結局、子供に期待します。お前たちは武士の子だ、しかも旗本直参なんだ、だからしっかりせよと。一葉は日記にこう書いています。

「母君は、いと、いたく名をこのみ給ふ質におはしませば、児、賤業をいと名めば、われ死すともよし、(子供がいやしい仕事をするならば、私は死んでもいいのです。)われやしなはんとならば、人め、みぐるしからぬ業をせよとなんのたまふ、そも、ことわりぞかし(これは当然でしょう)、わが両方(両親)は、はやく志をたて給ひて、この府(東京)にのぼり給ひしも、名をのみぞ給へば成けめ」明治二十四年九月の日記です。

親たちが偽の家系図を作つたり、買収したということを一葉は知りません。ただ、大変苦勞して武士になつた―郷土の誉れだということを知っているのです。だから母親は、人めみぐるしいことをするならば私は死ぬと「脅迫」しているのです。そして一葉は、その期待に応えねばならないと必死になった。これも一葉文学や一葉の愛を考える場合に大事なことなのです。

明日食べるどころか、今、食べる米もないのに母親は、温かい布団で寝たい、門があつて庭のある家に住みたい、門があるというのは士族の象徴なのです。格子戸を開ければという歌がありました、あれは町家です。漱石は、「ゲンカさま」と言われたようですが、あれは玄関のことを言ったそうです。そして玄関があるということは庄屋さまなのです。こういう家族の内部造反ですから一葉は大変苦勞しました。

小説家志向

では、一葉が小説家になろうとしたのはどうしたことかということですが、父親は、娘をどうかしてでも女学校にやりたかつたようです。当時、女学校進学というが大変なことです。そのころ、小学校の就学率は三〇パーセントです。一葉は日記に書いてあるのですが、父親は女学校にやりたいと言ってくれた。母親は、女の子に勉強させたら生意気になって駄目だ、お針かお料理だと言うのです。これは当時としては当たり前前だったのでないでしょうか。そして、あなたはどうかなのかと聞かれ、女学校へ進みたいという自分の意志をはっきり言えなくて死ぬほどつらかつたが、結局、母親の意見に従つたということで、小学校卒業直前で辞めたのです。それでもなおかつ、勉強がしたいということ、父親の友人の遠田澄庵というお医者さんですが、この人をつてに中島歌子の萩の舎という歌の塾に入ることになりました。ところが当時、「歌子」といっていても中島歌子の名前などは余り知られていませんでした。

「萩の舎」入門

現在、東京の後楽園球場（東京ドーム）から高台の方に登って行くと安藤坂、その安藤坂の途中に加藤さんという女医さんの病院があります。その病院のところが「萩の舎の跡」でプレートが立っています。そしてその坂をちょっと下りた所に、北野神社があります。その境内

に中島歌子の歌碑が建っています。

当時、中島歌子と言われなくてもどういう人か知らないことは先程申しました。一葉も知らない。すぐ頭に浮かんだのは、後に実践女子大を創設した下田歌子です。当時、華族女学校の学監です。そこで一葉は、あの名の通っている下田歌子のお弟子さんになれると大変喜んだのです。しかし、よく調べてみると、歌子は歌子でも下田ではなく中島だった。でも一葉は意地っ張り、下田は小川のながれで、中島は泉の源だ、だからいいと日記に書いています。

田辺花圃との邂逅

萩の舎に入った時に、そこにいました田辺竜子。この人は女学校を出ていまして、お父さんも、NHK、鷗外の「獅子の時代」にちらつと出てくるのですが、田辺太一といい政府の高官です。しかし、この人はお金に執着がなくて、長男の一周忌の法事を出すのにお金がなく困っていました。それを妹の田辺竜子が耳にしまして、小説を書いて、その原稿料を法事の費用にといいことで「萩の舎」という小説を書き、坪内逍遙のところを持っていきまして。逍遙はそれに手を入れて出版したのです。そして三十三円二十銭の原稿料を貰つたのです。

当時は印税方式がありません。日本で印税を考えた出したのは鷗外です。島崎藤村の「破戒」も自費出版です。函館の奥さんの実家から四百円、郷里、信州の銀行家神津猛さんから二百円、計六百円で出版したのです。「破戒」は明治三十九年ですから、印税制度はずつと後です。当時は原稿買取方式です。三十三円二十銭は現在の約三十三万二千元です。姉弟子である田辺竜子にそれができた。同じ「萩の舎」の三才媛といわれた花圃と一葉、つまり彼女に出来たことは自分に出ないことはないということ。一葉の将来像は、歌の先生になりたかつたのですが、お父さんが死んでお兄さんが死んで、そうして借金をどんとかぶってしまいました。一葉一家は債権者から逃れるため、

住所を転々と変えています。中島歌子は口べらしのために一葉を内弟子として「萩の舎」へ住み込ませました。一葉はなんとか起死回生を求めなくてはいけないと思っっている。しかし、中島歌子の内弟子と称しても現実には所詮、お手伝いさんなのです。歌子も、一葉が貧しいということと安心してまして、台所、つまり家庭経済の手の内を見せます。歌の先生は一見華やかに見えますけれど経済的に苦しい。そういうことに気付いた矢先に、姉弟子の花圃が三十三万二千円貰ったという一葉が作家になろうというのはこういうことなのです。生活のためなのです。

一葉の「われも二十歳になりしかば」の意味するもの

資料1の真ん中に、明治二十三年、一葉十九歳。「秋、母及び邦子(妹)と共に本郷菊坂町七十番地に移り、親子三人の賃仕事によって生計を立てた。一葉はひとり中島家に移って五カ月ほど止まった。」とあるのはこのことです。そして明治二十四年、二十歳です。一月、小説「かれ尾花一もと」。この原稿には日付けがあります。実はこの時から全集に残っている日記を継続的につけ始めました。もっと早くにつけているのですが断片的です。ここから本格的につけ始めました。一葉の日記は小説を書くための習作なのです。皆様は日記を書きますか。あの人にお金を貸したまだ返って来ない。こういうのは書きますね。今日は婦人大学講座の最終日、あまり面白くなかった。などということをお書き下さっても仕方ありませんけれども。Aさんとトラブルがあり、意見がくい違って議論したということ、生々しく書くこともあるし、また、避けて通ることもあります。時にはインシヤルで、Bさんと気まづかったなどと書きますね。

作家のいろんな資料を調べていまして、こういう大きな事件があったのだから、きつと記録してあるはずだと思っ調べても記録がないのです。書きたくないのですね。楽しくないこと―それを日記に書

くということは自己を客観的視することです。再現するとういことは嫌なことです。だから意外に抽象化してぼかしてしまったりすることがあります。

したがって、一葉の日記は若い女性のロマンだと思っのです。だっ小説の練習ということですから、日記にはこう書いてありますと言っ、とくとくとやる若い研究者の発表もありますけれども、それは駄目なのです。ある種の真実ですけれどもやはり吟味しないといけません。それが一つです。もう一つは△「かれ尾花」一もと△に、明治二十四年一月とはつきり日付が書いてあると先程も申し上げました。現在、台東区立一葉記念館、それからもう一つは、東大の教養学部にあります駒場に近代文学館がありまして、ここに資料が残っています。

「かれ尾花一もと」の現物にあたりましたところ、明治二十四年一月とはつきり日付が書いてあります。これは何だと思っますか。もう一つ日記の中に「我も二十歳になりしかば」(私も二十歳になった)とあるのです。これも若い研究者が、ちょうど二十歳の成人になったということに対する自覚だと言っていますが、違っのです。それは一葉が「私は二十歳になりました。田辺花圃(ペンネーム)が二十歳の時に小説を書いて三十三万二千円貰ったのです。私も花圃と同じ二十歳になった」ということです。条件は整った。視点を変えますと作家として行くという決意表明なのです。ですから、「我も二十歳になりしかば」というのは、今、言っましたように、社会通念としての二十歳ではないのです。これが一つの大きな問題になります。

半井桃水へ入門

次に、半井桃水への入門と久佐賀問題が、本日の中心になります。「一葉の愛」―真実と虚構―です。

小説家になるためには小説の先生が必要です。花圃の先生は時の中心人物である坪内逍遙ですから。そこで、どなたか適当な先生はいな

いかと考えているうちに、妹、邦子の友達で野々宮菊子が情報を提供してくれました。この野々宮菊子の紹介で、朝日新聞社の小説記者であった半井桃水、本名列きよといい、幼名を泉太郎といまして長兄と同じ名前なのです。この関係者の紹介で、一葉、二十歳の四月十五日に桃水を訪ねました。桃水は当時三十一歳です。たしか二十六歳の頃に結婚したのですが、すぐ奥さんが亡くなりまして、以後独身を誓っておりまして。したがってこの段階では独身だったのです。これが資料の写真の中で下の段の一葉の文学碑の隣、当時三十一歳、なかなかハンスサムです。久佐賀と大分違いますね。以前にある講演でこの資料を使いましたら、女子学生が前川清に似ていると言っていました。似ていますか。実は、この仲を取り持ったのが、別表(3)にある野々宮菊子です。コピーなものですから、やや指名手配のようになっていますが、上の方が三宅(田辺)花圃、下の方が野々宮菊子です。ちょっと怖い顔になっていきますけれども……。

そこで、資料二枚目左の方の真ん中の段に明治二十四年四月十五日の一葉の日記があります。こう書いています。桃水がまだ新聞社から帰っていません。そこでしばらく待っていましたら、やがて桃水が帰って来て、普段の着物に着替えて面談ということになりました。

「おのれ、まだ、かかることならはねば、耳ほてり唇かはきて、いふべき言もおぼえず、のぶべき詞もなく、ひたぶるに礼をなすのみなりき。よそめ、いかばかり、をこなりけんと思ふもはずかし、君はとしのころ三十年にやおはすらん。姿形など取りたててしるしおかんもいと無礼なれど、わが思うところのままを書くになん。色いと良く面おだやかに少し笑み給えるさま、まことに三歳の童子も、なつくべくこそ覚ゆれ。丈は世の人ですぐれて高く、肉豊かに肥え給えば、まことに見上ぐるやうになん。」(大変背の高い人です。ちょっと中略します。)「君が小説を書かんといい事訳、野々宮君より、よく聞きおよびはべりぬ(よく聞いております)。われ師とは言はれん能はあらねど

(私は先生という柄ではないですが)、談合の相手には、いつにても成りなん。(話し相手にはいつでもなりましよう)、遠慮なく来給え(おいで下さい)、といとねんごろに聞え給ふことの限りなくうれしきも、まず涙こぼれぬ。」

実は、父親が死んで兄が死んで、次兄虎之助は勘当になっています。年譜では分家ということになっていますが、実は陶器に薩摩焼の「金襴」(にしきで)焼着絵師としていい絵を書くのですが、芸術家肌なものですから気が乗らないと仕事をしないのです。気分が向いたらやるというのですから。その上、家のお金を無断で持ち出す……そんなことから武士の家柄に相応しくないというのです。明治十四年です。武家政治が崩壊して十四年経っているのですが勘当です。一般的、年譜では分家となっていますが、テレビ評伝でもそれに近い言い方がありました。父親が死んで兄が死んで次兄が勘当になって、もう一つ、親が決めた許嫁者も離れます。今日はあまり時間がないのでふれることができませんが、その許嫁者というのは新潟県の検察庁(地検)の検事になりました渋谷三郎という方です。偶然、田中角栄氏の逮捕日に調べに行きましたら右翼に門前払いをされました。七年後に検察庁に調べに行きましたらまたご縁がありました。判決の日だったのです。あそこに行く人はみんな下を向いて行くのですね。私も下を向いてはまじと思ひまして胸を張りまして、そして受付に行きました。「明治二十四、五年頃の検事の履歴書ありますね」と言いましたら、「はいあります。」「どうもありがとう。どこにありますか。」と聞きましたら、「はい二階の庶務課にあります。」「やあどうもご苦労さん。」とこういうふうにならずうざうざしくしまして、そうして二階の庶務課に行きまして、「実は下の受付で聞いて来ましたが、明治二十四、五年頃の検事のいろんな資料が残っているそうですね。」と言いましたら、「はいございます。」本庁から来たと思ったのじゃないでしょうか。そうしまして、おもむろに名刺を取り出して、渋谷三郎検事の資料を調べに来たと言いまし

たら、課長さんがびっくりされました。「決してご迷惑はかけません。研究者もひとの子、やはり判官びいきがありまして、許嫁者が一葉を裏切ったということで、渋谷三郎検事ばかりか悪者になっています。一葉もまたそう書いているのですが、私は違うと思うのです。それで『渋谷検事を弁護したい』と言いましたらまたびっくり。検事を弁護するとは何事だというのですね。それで私は、おもむろに自分の本を出しまして、他の方はこんなことを書いていますが私はそうではないと言いました、そうして極秘ということで資料を見せてくれました。そういうことで私は渋谷検事を弁護しているのですが。でも一葉の気持ちになってみれば、親が決めた許嫁者、出身は東京専門学校で現在の早稲田大学の法学部です。一葉にしますと、親が死んで長兄が死んで、次兄が勘当になって、許嫁が一葉一家が没落したということになって行った。一葉はそうとってしまっただけです。これも仕方ありません。その矢先に桃水が登場というのですから、桃水はラッキーボーイです。

話のもとにもどりますが、桃水は一葉に「私は先生の柄ではありません、でも話し相手にはいつでもなりませう。」こう言うのですから、まずは涙がこぼれても当たり前ではないでしょうか。一葉でなくてもこぼれますよね、そして桃水は苦勞人でした。弟や妹、両親を養っていました。そして夕食の時刻になりましたら、資料にもありますように、「遅くなりました帰ります。」と一葉が言いますと、「わが家には田舎ものの習ひ。」九州対馬の出身ですが、そういうことではなくて「古い友達も新しい友達も関係なく、ごちそうはありませんけれども一緒に食事してもらうのが我が家のしきたりです。私もご相伴させてもらおうといった具合の配慮ですよ。我が家のしきたりです、と言う表現は相手に精神的な負担をかけない——本当の配慮ですね。逆でしたら、先程のノアの方舟じゃないですけども自分の都合ですものね。私は桃水はいい人だと思うのです。このいい人にぞっこん惚れ込まな

い方がおかしいじゃありませんか。一葉は夕食後「もう暗くなりましたから」と言いましたら、車を用意してあります。人力車ですが……。資料にもありますように、この日から一葉の日記は桃水先生さまさまです。

桃水への愛の苦悶

「半井うしへはがき出す。明日参らんとてなり。」一葉から桃水へ手紙を出したと書いています。「しばらくして、うしよりもはがき来る明日拝顔し度し、来駕給はるまじきやとの文体なり。こは、おのれが出したるに、先立てさし出し給へるなるべし。」そして、「かく迄も心合うことのあやしきよと一笑す。」もう勝手にしなさいというものです。私、桃水先生に逢いたいのですと手紙を出した。そうしますと、桃水先生も同じ頃逢いたいと書いた。どうしてこうまでも二人の持ちが合うのでしょうか。こんなものですね。しかし、一葉は悪いんです。普通は仲をとり持ったくれた人、資料2頁の資料(5)に、「一葉の生涯と文学——半井桃水との邂逅」小説家志望の動機——田辺花圃との関係、そして妹邦子から野々宮菊子と女学校で同期生の鶴田たみ子、この鶴田たみ子と桃水の妹幸子と書いてこうと読みますが、これが同期生の桃水の家に下宿しておりました。こういう関係で桃水に会ったのです。桃水は初対面の一葉に向かって、親切に話をしてくれました。夕食もごちそうしてくれました。車も提供してくれました。おかげさまでありがとうございましたと仲介者の野々宮菊子へ報告するのが、最低の社会的マナーじゃないのですか。一葉は言わないのですね。ですから私は最初に言いましたが、一葉の恋愛というのは、恋愛のパターンそのもののズバリ。たとえばAさんとBさんが親しくて、BさんとCさんが親しいとします。ところがAさんはBさんの紹介でCさんと親しくなりました。Bさんははみ出す訳です。ある種の三角関係ですね。丁度、一葉はそれを地で行っているのです。ですから、恋愛は二人の

閉鎖的世界から出発するところなりませんか。仲をとり持ってくれた野々宮菊子に報告しないで、「かく迄も心合ふことのあやしきよき一笑す。」なんて、ひとりだけ喜んでいるのですから話になりません。困った事に、仲をとり持った野々宮菊子がなまじっか桃水を好きだったことから話がややっこしくなったのです。菊子は当然おもしろくないでしょう。どうしますか、引き裂こうとします。私が世話した一葉さんが私に一言も言わないで——桃水先生も先生だ私を無視して、と、この図式はよくテレビドラマになっていますね。本当に一葉の生涯はドラマそのものです。そこで二人の間を引き裂く恰好の材料が出て来ました。

誤解と偏見——鶴田たみ子問題

桃水の家に下宿している桃水の妹の同期生——私は鶴田たみ子事件と言っているのですが——女学生が妊娠しました。資料に写真があります。可愛い子ですね。その隣が生まれた子供千代です。父親は実は、桃水の弟浩（ひろし）、二十四歳です。ドイツ医学協会学校に通っています、この二人が恋愛してこうなったのです。その事実を野々宮菊子にはよく知っているのですが、それを一葉にどう伝えたかと言いますと、「みてごらんさい、あなたは桃水先生を尊敬しているようだけれど、たみ子さんのこと……なんとふしだらな先生、でも、あなたは先生と結婚する訳でもないし、婚約した訳でもないから、確かめる権利もないでしょう。」と釘を刺されてしまったのです。そうしますと一葉はカッコときてしまいました。尊敬する先生にしてなんたること。でもこういうことは世間でも往々にしてあることなのです。釘を刺されてしまったものですか、とうとう一葉は誤解のまま死んでしまったのです。千代さんが成長した後、一葉の日記を見まして「一葉さんが私の父のことを誤解していました。もし本当のことを知っていたらもう少し人生が変わっていたのじゃないでしょうか。」と言っていました。誤解

による人生の曲折の最たる例でしょう。

ところで、皆さんが真剣に聞いて下さいますので、つい、感動してシナリオにない余計なことまでお話ししてしまつて、時間があと僅かしかなくなつてしまいました。急ぎましょう。

「大音寺前」転居——「たけくらべ」成立の遠因

そうしてどうなったかと申しますと、どうしても生活に困つた、でもどうかしなくてはということとで商売で身を立てるということと、西村釧之助という、一葉の従兄すじに当る人が近くで商売をしていました。また、郷里の人間で広瀬伊三郎も浅草でお店やっていました。それでとうとう商売をすることになったのですが、どこを選んで思いますが。現在の台東区竜泉三丁目です。実は、吉原遊郭街です。私はこれは絶対、偶然とは思えないのです。商売をするために母と妹が山の手を探したのです。門のある家、庭のある家が欲しい、冗談じゃないですよ。もうどうにもならん生活破綻者が商売をやるのに、山の手に行つて私は士族ですと言つて商売できますか。会場の皆さんの中にはお店をなさつていらつしやる方もおられると思いますが、現代と全く意識が違うのです。士農工商ですから、つまり、「武士」から「商」に転落するというところで、「母親はただ嘆き嘆きて」と書いています。そうしてとうとう適当な所がないということで、一葉に任せるということになりました。どこへ向かつて行つたかと言うと先程申しました遊郭街です。重ねて申します。私はこれは偶然じゃないと思います。そして、「たけくらべ」成立の背景を考える時——もしこの遊郭街に行かなかつたら「たけくらべ」はできなかつたと思うのですが。どうしてかと言いますと、先の鶴田たみ子問題について一葉は、桃水先生がそうなら私だつてという気持ちがあると思うのです。そんなことで結局、遊郭街に足を向けた——たしかに生活が苦しいから同じ女性として身を売るといふことにある種の関心がよぎつたかも知れませんが、商

売に転落するということで、「萩の舎」の貴族や大家の子女たちに見られたくないということもありましたが、それでも遊郭街に行く必要はありませんでしょう。私は完全に桃水に対するあてつけだと思っております。一葉は転居するのに桃水に一言も言っていないから。ある種の心の家出です。

人間は衝動的に行動することがありますね。私もしょっちゅう衝動的に行動して反省しているのですが。しかし生活にはリアリティが伴います。一葉もその例にもれませんが衝動的に転居しました。転居してから「さるは新生涯をむかへて、旧生涯をすてんことのよこたわりて也。」と日記に刻み、そしてさらにこう書きました。「今までのあの家はかの人も足を止めたこともある。まれには自分のことを思い出してくれることもあっただろう、しかしこういうところに来てしまったらもうふたたび思い出されることもない。」これは明らかに桃水を指しています。そして一葉はこの日から塵の中の日記「塵中日記」と言って、自分を卑下しています。結局、気位の高い人がふと衝動的に高層建築から身を投げ落とす、そんな心情になったのではないのでしょうか。歪曲した愛は悲しいものです。桃水に一言たしかめればこうならなかったかも知れません。誤解と偏見は世の中にもいくらかあります。いくらかありますけれども、一葉はその最たるものです。この「大音寺前」は遊郭街ですし、ここで商売をやりますのに、私、山の手の人間よなどと言って胸張ったらだめなのです。そして、転居後の二十五日に西村釧之助のところを開店資金を借りに行きました。そうしたら「ありません」と言われた。そうするとなんと言ったと思いますか。「ないはずはない、彼ほどの家に五円、十円のお金がないはずがない。もしなかったら男でしょ、友達もいるだろうし、知人もいるだろうから借りて来て私に回したらどうだ。」借金取りじゃないですよ、お金を貸してくれと言った人間です。そして「樋口の家に二人残りける娘のあはれ骨なしか、はらはたなしか、何ぞや釧之助風情が前にかしら下

ぐるべきかは。」ひどい金借りですね。こういう、ひらき直ったような、啖呵を切ったような日記は今までの一葉の日記にはありませんでした。二つ考えられます。一つは、たしかにひらき直っています。それから、もう二度と桃水とまみえることがないだろうという、本当に追い詰められています。ということが逆に、色めがねを外し、袴を脱いだ、だから「写実主義作家」の樋口一葉が誕生した—そう思いませんか。

一葉終焉の地—丸山福山町へ転居

「たけくらべ」は三つありまして、未定稿で活字にならなかった「雛鶏」はこの「大音寺前」で出来ました。しかし、いかがでしょう、長兄泉太郎の死んだあと、自分がその年齢に近づいていきました。このままじゃだめだということに気がつきましたし、衝動的に行動した場合にはその反動があります。どうしても、樋口の家名を高めてから死ななくてはいけないということで、この生活を十か月でたんで現在の東京ドームの近く、転居する前の菊坂にも近い、もとの家まで歩いて十分くらいの所に移りました。狙いがあったと思います。実は久佐賀義孝です。どうしてもお金を借りたかったです。小説を書く自信は持ちました。しかし生活が出来ないので。そこで、当時、東大や早稲田の学生、谷崎もそうですが、「出世払い」というのがありました。書生さんたちが代議士や実業家、学者などのところで玄関番などをしていました。「末は博士か大臣か」、出世したら世の中に尽くすということなんです。これにヒントを得て、出世払いのできるような人はいないかと、一葉は必死になってスポンサーを探しました。そうしてやっと対象を得たのが先にも一部紹介した資料の新聞です。

久佐賀訪問—「秋月」と偽名で

この新聞の前後は日記がストーンと消えています。そして訪ねる前

日に「かみあらい」とたった一言書いています。皆様日記をつけている方で、今日、髪を洗ったと書きますか。そんなのは日常茶飯事ですね。入院してやっとお医者さんから許可が出て髪を洗ったのなら書きますが、健康な人が今日はシャンプーンをしたとは書きませんでしょう。一葉の記録はたった一言です。私はこの一言は重いのと思うのです。一葉は行きつ戻りつ逡巡を繰り返して、結局は久佐賀しかいないと決めまして、頭を洗い「沐浴齋戒」して秋月と偽名を使って乗り込みました。

資料に当時の新聞を用意しておきましたが、世間は久佐賀を神様だと言っているのです。倒産した家もたちまち回復したり、病気を回復した、その礼状が二千何百と載っているとあります。一方、横浜で宝くじをやったところ、これが全部ピタリと的中したと米国人が書いています。こういうことですから、久佐賀に対して丁丁発止ああ言えましょう。こう言う言えばああ言うーみごとにとわたり合いました。

瀬戸内寂聴さんがおられます。私も一緒にして小学館の一葉全集の注釈を担当したのですが、瀬戸内さんが旭川で講演なさったのを聞きになりましたでしょうか。後でラジオで流れていましたのを他の方から教えてもらいましたが、その中で一葉は久佐賀から毎月二十五円ふんだくったと瀬戸内さんは言ったそうですが、実は毎月ではないのです。私は一葉の名誉のために言います。瀬戸内さんは作家ですし、時間が三十分しかなかったからおもしろおかしく言ったと思うのですが、私は研究者のはしくれですから実証的にしか言うことはきかないです。そんなに貰っていません。毎月ふんだくったということはないのです。そうして一葉は自分で生活の目途が立った時、久佐賀とピターッと縁を切りました。

久佐賀体験と後期一葉文学の関係

そして明治二十八年、必死になって作品を書きました。いわゆる「奇

跡の十四か月」です。しかし生活は楽ではありません。そして結核のため明治二十九年十一月二十三日、二十四歳六か月で生涯を閉じました。

当時の新聞を見ましたら、死亡時刻が午前五時から十一時までとあるのです。ご家族が看病疲れしまして、五時頃息がなくなったとか、十一時頃ちょっと動いたような気がするという感じなのではないでしょうか。そして不謹慎なのですが、栄養が悪くて骨と皮ばかりだったそうです。

一葉は一方で「たけくらべ」という作品を書き、かたや「にぎりえ」「十三夜」と暗い作品を必死に書きました。しかし死が迫った人間にとって自分の人生にどこか納得できる心の句読点がなければいけないでしょう。それが「たけくらべ」です。つまり、一葉の人生でただ一つ心のともしび、つらいながらも忘れ得ぬ桃水との思い出—これを昇華的に書いています。

桃水は、よもや一葉が鶴田たみ子問題で誤解しているなどとは知らないのです。ですから一葉に対して物心両面から一生懸命に面倒を見ました。たみ子の娘千代が五歳になっても、桃水が弟の不始末に責任を感じて面倒を見ているから誤解が誤解を生みました。一葉は日記に、ひよっとするとこの子の母親になっていたかも知れないという意味のことも書いています。

そういうことで暗い作品を書けば、どこかで自分を救わなければなりませんでしょう。それが先ほど言いました自己の存在証明です。それは繰り返しますが、桃水への愛憎でしょう。そして「たけくらべ」に未定稿「雛鶏」という下書がありますから、それに基づいて詩的抒情性豊かに「たけくらべ」を書きかえることができたのではないのでしょうか。たしかにあの「たけくらべ」の美登利は信如に対して表面的には憎しんでいるようにみえます。しかし最後には違います。愛していることがわかります。だから信如は、やがて美登利が初潮をむかえ

て遊女になる、その遊女になる前に当初の予定を一年繰り上げて坊さんの学校に行ったじゃありませんか。遊女になった美登利を見て行くのじゃなくて、まだ清純なままの美登利に水仙の造花を届けました。水仙は純潔の花ことばですが、この水仙の造花を美登利の家の格子門からそっとさし入れて、いつまでも清純無垢であってほしいという願いを託して旅立ちました。あれは一葉の心情だったのではないでしょうか。

「愛と人生」―「一葉の愛」―「真実と虚構」

今回の婦人大学のメインテーマは「愛と人生」ですが、残念ながら一葉の愛は、誤解と偏見に彩られ、生活のリアリティが伴う苛酷なりアリズムが一葉の心の余裕をなくしました。

これから世の中は目まぐるしく動いていきます。価値観も変わりま
す。新人類などという言い方もあります。しかし学生諸君は生でぶ
つかれば分かってくれます。皆様のお子様方のご立派だと思えますが、
心のゆとりや余裕がありませんと、一葉のように家族の中でも精神的

孤児になってしまおうのです。一葉は懸命に生きながらも家族の内部造
反をくってしまいました。ですから本当に自分というものを自己凝視
し、確かめる余裕がない。もし母親に一言、桃水先生こうなのと話を
していましたら、妹邦子が確かめたかも知れません。そして、それは
誤解よところなればまた人生の局面も変わっていたかもしれませぬ。

一葉は若くして、しかも生業も確立しないまま一家の生計を図り、
しかも親が実現出来なかった武士の家柄を支えていかなければならな
かったのです。人間みな重荷を背負って生きています。だからこそ、
心の支えとして、句読点として愛を素直に純粹な形で表現したいと思
います。しかしそういうことが出来ないのが一面、人生だと思うので
す。しかし、人間、愛がなければ生きられません。愛のない人生は空
虚そのものです。しかし一葉のような愛を皆様でしたらどうなさいま
すか……という問題を、今回、答えを出しませんでしたが、一を聞い
て十を悟る皆様ですから、この課題を残しまして失礼させて頂きます。
ありがとうございました。

(札幌大学教養部教授)